

無 邪 光

本在光 光を光にばぬけう 光くみやのあふあふらんれ 光

言の葉にあらはしがたしみほとけの

光にふれし心の程は

擇 法

わしの山高嶺の月を見ほしくば

ふみ登りゆく道なまよひそ

精 進

月^{つき}見^みむと思^{おも}ふ心^{こころ}に誘^{さそ}はれて

身^みの疲^{つか}れさへ忘^{わす}れてしかな

いさましく進^{すす}まばみちのけはしきも

おぼえぬばかり安^{やす}くこそあれ

喜

みちすがらほのかに月^{つき}のかげ見^みえて

いかばかりかは嬉^{うれ}しかりけり

輕
安

月^{つき}見^みんと心^{こころ}も天^{そら}にすむときは

身^みも覺^{おぼ}ほえず安^{やす}らけきかな

定

雲^{くも}晴^はれてみそらさやかに照^てすなり

わしのみ山^{やま}の有^あ明^{あき}の月^{つき}

捨

驚^{おどろ}の山^{やま}己^{おの}がすみかとなる時^{とき}は

常^{とこ}盤^わにほふ月^{つき}を見^みるかな

念

照^てる月^{つき}を己^{おの}が心^{こころ}にすみぬれば

くらき路^{みち}には迷^{まよ}はざりけり

○

弓^{ゆみ}を射^いるすべをならふに的^{まと}をわが

手^てごろと（　　）

射^いるみちを習^{なら}ふに的^{まと}と手^てごろとの

けじめをうるは我心^{わがこころ}なり

的^{まこと}に入る^い心^{こころ}は我^{われ}にありながら

手^てごろを的^{まこと}と我^{われ}とあふなり

おもひ射^いの心^{こころ}の矢^やはづ一^いすちに

みむねの的^{まこと}に當^あてもこそせめ

あみだ佛^{ぶつ}におもひ射^いる矢^やは一^いすちに

みむねの的^{まこと}にあてもこそせめ

三昧無爲即涅槃

阿彌陀佛^{あみだぶつ}と心^{こころ}はほとけにうつせみの

我^{われ}をはなれてのどけかりけり

たのしさを何にたとへん阿彌陀佛に

心は入りぬ我を離れて

御佛の樂しき園に逍遙ふ

さまやの床の安らけきかな

阿彌陀佛を念ふ心に我なくば

こゝもさながら無爲の都ぞ

安らけき無爲の都に逍遙

心は我を離れにき

(三) まやのこころのさやけさは

(一) 明けたる東雲の天

み佛はつの樂たのしき園そのは外ほかならず

念佛ねぶつさまやのゆかのなかにぞ

こゝもまたきよきみくにと知しらざるは

心こころのまなこひらかねばこそ

極樂ごくらくをよそになもとめそ三まやの

我われをはなれし中なかにありせば

みひかりに融と合ける心こころは我われもなく

無爲むゐの都みやこにすみ遊あそぶかな

目めに見みえぬものの神聖しんせいと尊嚴そんげんとは

すめる心こころに照てりとほるなり

超日月光

花見月と見ゆる人けから花見と見ゆる人けのまじりて

あみだぶにとはに照らさるゝ心には

我てふものゝかげもとどめず

衣

世のちりにけがれぬ無垢の衣にも

なほ心して染めじとぞおもふ

あやにしき身にまとひてもこゝろには

ふすまなき身の夜寒あはれさ

あはれなぞおもふ

あたゝかな慈悲の衣をかさねきて

ほとけのなかに臥すたのしさよ

たち縫もおのづとなせる妙服を

着つる心はとはに安すけき

みほとけの清き光を衣とし

念の玉をかざりとはせん

八億の念の玉をかざりとし

妙なる名を衣とはせめ

のゝしりの矢もそしりの丸も通らぬは

慈悲の衣のあつければなり

のゝしりの言ことばの鐵丸てたまも通とほらぬは

忍しのぶの衣ころもきればなりけり

いかばかりするどき矢やさへ通とほらぬは

忍辱しのぶの衣ころも着きればなりけり

大おほミオヤの忍辱しのぶの衣ころもまとふ身みは

そしりの矢やをもいとはざりけり

いかばかりはげしくせめぐ世よの中なかも

忍辱しのぶの衣ころも貫ぬく鐵丸てたまもなし

ますかゞみ神かみの意こころにはちざるは

誠まことの衣ころもきればなりけり

いかばかりうそのかざりをよそふとも

己おのがこゝろにはづかしきかな

ぬがむとてぬげぬは本もとのまじゝろに

本もとより着きつるまこと衣ぎふかな

ぬぐこともきることもなきもとよりの

からころもこそ誠まことなりけり

ぬぐこともきることもなきからころも

これ本ほん來らいのきのみきのまゝ

ミオヤよりうけたるまゝのから衣ころも

ほころびもせずあかつきもせじ

大^{おほ}ぞらに本^{もと}より着^きつるはれ衣^{ころも}

日^ひ月^{つき}や星^{ほし}を玉^{たま}のかざりに

大^{おほ}ミオヤは雲^{くも}の衣^{ころも}に日^ひの珠^{たま}を

かざりとはしていかめしきかな

大^{おほ}ミオヤの心^{こころ}づくしのかざりこそ

其^{その}まゝ子^こらが玩^{もてあそ}びかな

ミオヤより賜^{たま}へる天^{あま}のはれ表^{ころも}

日^ひ月^{つき}や星^{ほし}を玉^{たま}とかざらん

大^{おほ}ミオヤは天^{あま}つみそらを衣^{ころも}とし

日^ひ月^{つき}と星^{ほし}を玉^{たま}とかざりつ

いと聖^{きよ}きミオヤの聖^み旨^めあふぎては

こゝろの衣^{ころも}そゝがんものよ

かへりみてはぢらひそゝ人^{ひと}こそは

きよき衣^{ころも}をきしかひぞある

かへりみてはぢらひつるも大^{おほ}ミオヤの

まことの光^{ひか}りあればなりけり

きよめますきよきひかりのなかりせば

ふたゝびきよくならまじものを

食

法の身の智慧の命をさそふるは

ミオヤのかてのあればなりけり

かぎりなき永遠の生命を養ふは

念佛さまやの糧にぞありける

たましひを受けたるかひやなかるらむ

つきぬ命のかてを受けずば

永遠につきぬ命を養ふは

阿彌陀はとけのかてにぞありける

ミオヤより受けし命はミオヤより

たまはるかてによればなりけり

大^{おほ}ミオヤの壽^{いのち}をおのがいのちとし

受^{じう}用法^{ほふく}樂^{らく}をかてとして活^いきん

大^{おほ}ミオヤをおもふ心^{こころ}に融^{とけ}合^あへる

法^{ほふ}悦^{えつ}の味^{あじ}のきはみなきかな

うけといふうけ多^{おほ}けれどみほとけの

法^{ほふ}悦^{えつ}ばかり妙^{たへ}なるはなし

法^{のり}の味^{あじ}さまやのこんすばかりなり

きよきいのちを養^{やしな}ふかては

大^{おほ}ミオヤの恩^{めぐみ}寵^{ごう}をおもふおもひにぞ

きはみつきせぬあちはひはあれ

言ことの葉はにつくせぬばかり妙たへなるは

念佛ねぶつさまやのあちはひにこそ

海山うみやまの味あじひ盡つくせしひとにても

佛ほとけの味あじはひしられざりけり

あちはへどまたあちはひの盡つきせぬは

ミオヤにうけるかてにぞありける

大おほミオヤのめぐみの酒さけに酔よひぬ身みは

世よのうきごともおもはざりけり

あみりたは世よにたぐひなき聖人せいじんの

こゝろを養やしなふかてにぞありける

おのが身もこゝろも融溶るばかりなり

ミオヤのなかに融け合ふ折には

大ミオヤの醍醐の味をのむ人は

とはにたのしき心なりけり

くみかはすさまの玉の杯に

月をやどしてのまんとぞおもふ

くみかはすさまの玉の杯は

我みほとけとともにやあらん

今はまたさまのさけをのまざれば

一日だにもすごしかねつる

くみかはすさまやの玉たまの杯さかづきは

たゞみほとけとさしむかひなり

夜な／＼さまやのさけに酔よひふして

阿彌陀あみだほとけと寝いぬる樂たのしさ

三まやの玉たまのさかづき我われはとり

あみだ佛ほとけよさして玉たまへよ

世よのことはさもあらばあれ我われはたゞ

三まやの酒さけをのみてくらさん

いかばかりのみてもつひに盡つきぬかな

我わがみほとけの賜たまものの酒さけ

このごろはいよくいやしくなりにけり

法悦ほふくの味あじにあくこともなく

かぎりなきいのちとなりてたえまなく

食くふもあかぬは法喜ほふきの食じき

かすもなき三世さんよの佛ほとけの味あじはひし

法喜ほふき禪ぜん悦ねつをわが糧かてにして

いかばかり味あじはひてもまたつきせぬは

彌陀みだより流れいづる泉いづみか

大おほミオヤのみむねより湧わく水みづなれば

のみてもく盡つきることなし

おもひにもまた言ことばにも及およばぬは

三さんま耶やの中なかに味あじはふ心こころぞ

量はかりなき靈れいのいのちをたもてるは

念ねん佛ぶつさまやのかてにぞありける

法はふ悦ちつの靈れい的てき氣き分ぶんは春はるの日ひに

さくら花はなさくいろにたとへん

天あめ地ちにみちみつばかりにおもほへぬ

美び的てき氣き分ぶんの樂たのしき心こころは

法はふ悦ちつの妙たなる味あじをおぼへずば

靈れい長ちやうと生うれしかひやなからん

三摩耶の筵にいまはつらなりて

聖き聖とくみかはすかな

聖かりし靈のいのちを養ふは

三摩耶の靈のかてにぞありける

天地のよろづはなべて大ミオヤの

みはからひより成るとしらすや

住

かがやける玉の宮居もなにかせん

神に安き栖居なからば

とはに住む神の宮居なきものは

實に貧しける者にぞありける

大ミオヤの玉の宮居を宿とせば

いかばかりかは心やすけれ

はてもなきかぎりもあらぬ大空に

みてるめぐみみを栖かとはせん

がぎりなきミオヤのみむねをむねとせば

法界宮を我胸（　　）

今はたゞおちおそろしきこともなし

大みふところにすむ身なりせば

恐ろしき鬼と住むから苦しけれ

佛のなかの心安きに

大ミオヤの法界宮を栖かとし

永世の春はのどけかりけり

厭はしき人の世としらば今よりは

あみだのなかにすみかへて居れ

本よりもミオヤのなかに在りながら

迷の雲ぞへだてこそすれ

迷ひより娑婆とは見ゆれさとりなば

みなこのまゝに浄土なりけり

さとりなば何處も無爲のみやこなり

たゞ西方とのみなおもひそ

忌はしきおのがまよひをぬぎすてゝ

皆みだ尊のなかに住めかし

のどけさを何にたとへん大ミオヤの

みどのにすめる此心をば

ありといふあらゆる國よりえらみたる

おやのみくにを栖かとはせよ

心だに聖旨の中に住みぬれば

つひにはまこと顯はれぞすれ

寂光じやくくわうのみやこを己おのが栖すかとは

ひとりのミオヤしればなりけり

眼めに見えね心こころは無爲むゐのみやこなり

あけなばよろづ顯あらはれぞする

こゝにある密嚴淨土みつこんじやうどしらねぬは

ひとりのミオヤまだしらぬから

寂光じやくくわうのみやこといふは外ほかならじ

ミオヤのなかの異名いみやうなりけり

大ミオヤと數かずかぎりなき同胞たらふと

すみてうれしき蓮華藏界れんげざうかい

めにもみえばいかにうつくしかるべけれ

すべてに超えて無爲のみやこは

安からぬ六つのちまたをはやくでゝ

みだのみくにをすみかとはせよ

こゝもまた無爲のみやことしられけり

あみだ佛のなかにすむ身は

あめつちもみなみほとけのなかなれば

あみだのほかにすみかやはある

こゝろなき人はいかにとおもふらん

このあめつちも法の身なれど

○

人天と聲縁二乗の上に超こえ

最高理想を佛陀はいつたとは云いふ

宇宙にすべてに超こえて高たかかりし

心こころを佛陀はいつたとはいふ

釋尊

あのくたら三さんみやく三さん菩提ぼだいの華はなひらき（さきて）

伽耶がやの園生そのふに匂におひぬるかな

三世^{さんせい}てらす法の^{ほの}光^{ひかり}のあらくば

人^{ひと}はやみ世^よにまよふばかりぞ

ながき夜^よのねむりの夢^{ゆめ}もさめにけり

臘^し月^{げつ}八^{はち}日^{にち}のあかつきの空^{そら}

八相釋尊

雲^{くも}ゐなるトシタの宮^{みや}に照^てる月^{つき}は

天^{あま}ひと草^{くさ}を照^てしましけん

無明^{むみやう}にまよふ子^こらを照^てさんと

ぼちさは天^{あま}そらをはなれし

() のまゝのはゝそのもみち葉は

夜はしぐれに色つきにけり

まち遠く闇路の旅につかれにき

あけてうれしきしのゝめの天

西東北や南に七歩み

世を救ひぬしのあるきはじめに

たぐひなきこゝろを照すみ光は

ラビの園生にてりそめにける

うひ聲のひゞき六合にわたりける

我のみ世々のひかりなりとは

世にはまたなきたふとき天つ王も

眞理の王にはうやまひにけり



玉津島明神

立^{たち}かへりまたも此^{この}世^よにあとたれむ

名^なもおもしろき和^わ歌^かの浦^{うら}なみ

(古歌より)

千^ちはや振^ふる玉^{たま}のすだれをまきあげて

念^{ねん}佛^{ぶつ}の聲^{こゑ}を聞^きくぞうれしき

(古歌より)

夜^よもすがら佛^{ほとけ}の御^み名^なを聞^ききつれば

ことひとよりもなつかしきかな

(古歌より)

みだ頼^{たの}むひとをむなしくなすならば

我^{われ}日^ひの本^{もと}の神^{かみ}といはれじ

(古歌より)

いにしへの我名わがなを人ひとにあらはして

なむあみだ佛ぶつといふぞうれしき
(古歌より)

またもまたあらばや人ひとにをしふべし

なむあみだ佛ぶつの六むの外ほかにも
(古歌より)

某女史の喜の祝に

喜よろこびの光ひかりのなかによろこびの

歳としをつもるはみだの御みめぐみ

某老人の計に

つゆの身はきえにけらしもいまよりは

こゝろは華はなのうへにやどりつ

またもなき華はなのなかばをわけよかし

やがてゆくべきわがためにもと

某氏への御たよりに添へて

そめやらでたゞ一すぢにしら絲いとの

くりかへしつゝおもひへにけり

むすびてし縁えにしにあれば白絲しろいとの

おもひにかけてくるよしもがな

しらいとのむすぶえにしをくりかへし

そめては世々のちぎりともがな

もろともに同じ蓮をちぎりつゝ

あみだ佛をおもひわすれそ

後の世におもひかけてなわするれそ

なむあみだ佛といひなかの里

花の上になかばわけてとちぎりぬる

我友びとのこひしかりけり

外に見えぬ己が心のまゝは

あみだ佛やしりたまふらむ

やがてゆく花はなのうてなにのぼる日ひに

まゝおもひでむけふのちぎりを

おもひつゝこひしき時はあみだ佛ぶつと

いやましみなをとなへはげませ

とてもまたつくせぬ言ことの葉はなりせば

無量壽國むりやうじゆこくにいたる日ひをまつ

歳のはじめに

とことばに照るみひかりのなかながら

なほあらたまのとしのめでたき

幾千とせかはらでとまで祝ひしな

まさることしの年のめでたさ

歡びの光の御名を稱へつゝ

いのりまつなりきみがみさかえ

量りなき壽の御名をたゝへては

まづあら玉の年をことほぐ

あらためて祝ふ言葉もなかりけり

青無阿彌陀佛の御名の外には

あらたまの光にみえてあけわたる

年の祝に御名をとなへむ

あゝ目出度無量壽佛の御名をもて

ことぶく外に言の葉もなし

萬代と祝ふもしばしかぎりあれば

無量壽佛の御名ぞ目出度し

あらたまの年の祝に煩惱の

いぬもかはりて菩提とはなれ

あらたまのひかりのなかにあらたなる

年を迎へていやあらたなり

○

うつりゆく時とわが身はうつるとも

こゝろひとつはなむあみだ佛

なんのかのとおもふも無益なり

たゞ／＼たのむ南無あみだ佛

忘于世
かの國に心うつせばちる花を

摩訶摩多羅華のあめふるぞとおもふ

世間相當住

白雲とまがふもかれ木の冬山も

おなじ吉野のさくらなりけり

諸法實相

うき雲はありやなしやとあらそへど

たかまの原はもとの身にして

梅花

さきだちてひらけるはなのあらなくば

あけぬる春のこゝろなからむ

佛名唱ふ聲を聞きて

きくこともいとなつかしや南無阿彌陀

わがたらちねのみ名とおもへば

魔郷不可停

かへりなむいざこれよりは極樂へ

六つのちまたにこゝろとむな

仰於佛願寄于戀

玉の緒も絶へなばたへよ身もすてん

戀ひてぞたのむ南無阿彌陀佛

ねてもまたさめてもおもひの忘られぬ

あはれ夢にもあれ南無阿彌陀佛

聞佛願歡喜

おもひでて日にいくたびか袖ぬるゝ

すてぬちかひときくぞうれしき

欣求淨土

後の世は日々ちかくなりけり

あはれたのしきかの國のたび

かす多き草々花にすぐるゝは

妙なる法の蓮花なりけり

夏のよのすゞしき風もうかりけり

ちる日さだめぬわが身おもへば

青柳の緑りの糸のみだるれば

みぎはの水もうかれぬるかな

夕さればさわ田の苗もいろしろく

葉ごとにおかる玉の白つゆ

あしたに早く鉦とりて

あさまだき草葉にかゝる露とりて

まづしめしみむ水くきのあと

南(からめ)と無すべる糸は阿を柳の

彌さを陀だしき佛かみどりかな

七重八重さくらのなを見るもうし

うつろひやすきわが身おもへば

あすといはゝたのまれぬかなけふくるゝ

きえてくやしきいりあひのかね

ねてはゆめさめてはうつゝおもかげを

おもふたえまの南無阿彌陀佛

忍ばれぬおもひの聲はいくたびや

日に六萬遍のみなをよばひて

文文の花はなひらける御代みよにあふひぐさ

日々色香いろかいやまさるらん

試こころみに(おぎなふ)よりは法のりのみち

眞事心まことこころにふかくまなばん

南^なげきつゝ無^むす（）れてまた阿^あはれなり

彌^みもすて陀^たのむ佛^{ぶつ}かきちかひを

心識如幻

これをぞとおもへばこれもこれならず

さてあやしけるわがこゝろかな

地球

あかねさす糸^{いと}もてかゝる小^こてまりは

たがまはしけんあくことなしに

忍

道^{みち}のこゝろまだ浅^{あさ}からば浅^{あさ}茅^ち生^ふの

おのゝしの原^{はら}忍^{しの}びかぬらむ

花^{はな}の上^へに心^{こころ}お（くこそ）うれしけれ

きえなばきへよつゆのいのちは

こひしけれにしにかたむくゆふひかげ

さすがにみだをおもひくるれば

月前述懷

いたづらになぞ手枕^{たまくら}をてらすべき

ふみをよめとの闇^{やみ}のつきかげ

あのくたら三^さみやく三^さ菩提^{ぼだい}の月影^{つきかげ}は

こゝろのそらにさやけかりけり

奉持經法

つらぬきで我冠^{わがかんむり}とかざりせむ

三世^{みやよ}を照^{てら}せる法^{のり}の白玉^{しらたま}

くもとのぼりあめとくだりて山川^{やまがは}の(川^{かは}水^{みづ}も)

流轉^{てんじやうじ}生死^{しじ}の水^{みづ}を見る哉^{かな}海^{うみ}に入る哉^{かな}

南無とおもひちかひのつなにすがりつゝ

あみだほとけと操るばかりなり

八萬四千の法の通路さもあらばあれ

みだのちかひの船にまかせん

摩訶般若波羅密多の海の荒磯に

顛倒妄想を碎かんとぞおもふ

やみのよになける蚊のこゑかなしけれ

ちをわけにけるゑにしおもへば

あけにける年をむかへてなにかせん

つゆのわが身のきへぬばかりに

きえにけるけぶりのあと、おもひしに

いま世をてらす法のともしび

おもひだすおのがこゝろにまよひてぞ

法のみちをばわすれこそすれ

明けき目も照す月日のあらなくば

見ゆやみえぬや心みよかし



小童十一歳に垂んとする時詠讀して己が志を暢ぶ

植て見む學びの園に道の樹の

文の花さく千代にほふらん

いにしへのかしこき人のあとぞかし

ふみ見てゆかん經の道芝

いにしへのかしこき人の道

—

われは文みてえものこそすまじ

天が下ひじりの道のくさぐさの

ふみ見て我は何残すべき

ふるさとはいづこと問はゞ下ふさの

手賀の浦へのわしの谷の里

爲兒嫌竹馬

唯好書籍類

吾亦無他望

唯樂聖賢道

開看滿卷書

天下亦無遺

十六七歲

嬋妍美人嬌容巧笑姪章蕩吾謂色賢易

滿十九歲、出家學道

發願一切聖賢道西天教法出世間正學大道光明最

勝願爲法出家剃度昇佛大道已出塵境初入眞門

出家の日

たらちねよ我恩愛のつなときて

苦(奇)しき法海わたらせよかし

○

十年學道窓。螢雪鑽仰。月下窓幽遠。月下光明。積年宿昔(志望)。志望焉遂。積年願樂。初適神意。精神悅豫。情意清潔。長日忘食。永夜忘睡

草庵にこもりて一切經を閲みしける頃

我庵の庭の夏草しげれかし

訪ひこむ人の道つかぬまで

すてがたき家いへを出いづるは上またもなき

たゞ法のりの道みちもとむばかりに

すてがたき家いへを出いでゝぞまなばなむ

このうへもなきたかきみ法のりを

ふみも見みむおもひの川かはにかけおきし

はしはまことのみちわたしなり

雪ゆきのふる日ひかい澤さわ畔はたにて

ふりつもある雪ゆきの山路やまぢのかい澤さわに

身みもすてよかし法のりのためには

法のりのためつくすこゝろにくらぶれば

まだあさかりし雪ゆきの山越やまこえ

老師世にいませし時弘法のために新たに開きし村里に布教道場をたてむと心か煩はしたるにいまだ其事を果さずしてみまかりし故弟子其恩海を報ぜむため身を之に従事しぬる

法の師のめぐみのうみに捨小舟

身をあらなみによしくだくとも

下總なる習志野はらはむかし牧野なりしないまは土地を開きて民草のすめる里ともなりしにいまだ法の道を布かざりし故法の道をも弘めまほしく思ひて

習志野のしげさくさばをふみわけて

御法の道のひらかまほしき

まきのさへいまはひらけし法のみち

末の世までもよくひかるらん

冬 夜

閻大藏凡七千卷。三年功成宿願。今爲師遺志。新寺創建。

四方遊化。結緣衆生。爲報師恩。不厭碎身。爲弘正法。何嫌粉骨。

南にしおはゞ無かしひじりの阿とこひし

彌ちを陀づねて佛かくいらまし

（二十餘歳東京本所菊川町鈴木氏方にて御大病後その姿を寫し玉ひて）——編者謹註

法のため露のいのちをこのまゝに

かけて示さむ水くきのあと

（其當時鈴木氏より唐綸子の袖ナシにつけて送り參らせたる歌にかへして）

冬夜衣薄寒氣徹レ肌

恩愛衣厚感情徹レ肝

おめぐみのあつきころものあらなくば

いかにわたらん冬ふゆの月つき日を

菊川町をいつるとき

花はなあやめまためづらしきころよりも

いまはなごりの菊川きくがわのさと

すみぞめの袖そでのぬるゝは露つゆならで

都みやこをおもふなみだなりけり

鈴木満恵童子訪用唱歌

春のなかばも過ぎぬ間に、庭の梅が香芳ひぬる
 夜の嵐の烈しきに、散りぬる身こそいと惜しや
 たらち乙女の朝夕に、撫でゝ育てし恵みをば
 廣きわだつみ限りなく、沈みぬる身のいと辛き
 朝夕唱ふ聖名の聲、鐘のひびきに夢さめて
 都の花や九重に、開くためとてつとめしぞ
 無上世尊の御身さへ、涅槃の雲に隠れしぞ
 しま黄金の御はだへも、せんだのけむりとなり給ふ

わけて行く袖のなみだは草の露

かわくは秋の又あはん日ぞ

かなしくも世のならしのとあきらめて

花のみやこを立出るかな

（

）あらば我も思ひをかへりゆく

我ふるさとの野むら山家に

つくらひし玉か乙女がいろよりも

おのづからなる花の香ぞよし

いにしへにむすびし契りあらずば

いかでかかくはむつびしぬらん

(その頃深川鈴木家にて)

晝 寝 (狂歌)

(朽)ちぬ木といましめあれど夏の日に

手枕にぬることのたのしき

ひるねしてはまぐりならばおしや迦さん

ねないがよけれやおしやかなになれ

ひるねするよくみてたべよ孔子さん

あなたとあればこゝらでもよし

辨つくのきちがひ坊主がでたらめに

なにをよんでも狂歌なりけり

おしやかさん孔子さんでも理が理なら

ひけはとられぬ今の世の中

御釋迦様あなたは提婆がいやでしょう

わたしやあなたのいましめがいや

すまの浦にすゝしき風のきぬらん

あまのとまやに、身をやすらへん

しもふさや

しのはつのおかにもふでむふもとにて

さてながめん(と)やまのけしきを

きて見よやくさくいとまかほらん

はなはさながらとはのにしきか

高

またもまたこの上もなき法の道

高野の山にもとめえんとて

低

久方の天津雲井の月よりも

高きほしさへ海にかくれて

高天原雲をしのげる月かげの

水のそこにもふかくうつりて

遠

來ぬ人を一夜のまつまどほ遠し

いかばかりかはまちとほきかな

南らし野に無すぶ庵に阿さ夕な

彌だのちかひを陀のめ

(

南。か。く。に。無。す。ぶ。縁。は。阿。さ。から。じ。

彌。の。り。の。陀。め。に。佛。か。く。ち。ぎ。り。て。

深川の里

ふ。か。み。草。か。ら。く。れ。な。い。に。か。を。る。ら。ん。

は。な。の。さ。か。り。の。と。め。る。す。が。た。に。

は。な。の。み。や。こ。に。身。を。お。く。と、思。へ。ば。い。つ。も。春。か。な。と。
の。ど。け。き。こ。ち。に。草。し。げ。き、夏。を。も。し。ら。で。久。方。に。
花。の。は。や。し。を。立。ち。出。て、我。ふ。る。さ。と。に。立。か。へ。り。

見。れ。ば。を。ど。ろ。く。き。の。ふ。ま。で、花。の。み。や。こ。の。春。な。り。と。
く。れ。る。日。を。し。き。に。こ。と。な。り。て、し。る。も。あ。は。れ。は。草。の。色。
き。く。も。か。な。し。き。蟲。の。音、し。る。に。つ。け。て。も。あ。き。け。ら。し。

昨日は久し振りにて師匠のはかにまうで、松の林のなかに夕ぐれが花を折り
香をたき何となう五年前の事を思ひ出してあはれげにおもひ、今は苔の下にて如
何なりしかと昔存生の面影目にみえて自づと涙も袖にしみ

苔のしたいかにわびしきものならん

おもへばなみだとどめがたきに

とどめてしその面影に問ひけれど

答ふるものは松風の音

亡師七回忌にあたりて墓前にて

七年のむかしをしのぶ我袖の

なみだをひとのたまものとする

教師補を受けよとすゝめられしとき

われはこれ佛弟子なればゆるせかし

世渡る師補をいとふ身なれば

香衣なうけよとすゝめる人に

色やまた香には染めじとわが袖は

たゞすみぞめのひとへころもぞ

関大藏經

牟尼尊とく(き)羅漢(が)結びし白糸を

我くりかへすしづのおだ巻

聖經をよみて聖蹟のしたはしければ

濱千鳥あとを見てよりあくがるゝ

鳴く音をいまは聞くよしもがな

白露をとめおく夜にはをみなへし

一しほいろのそひまさるらん

秋の野に人(な)なければをみなへし

われに(せて手折らま)

ひるは見^みて(はとめおかむをみなへし

かざせしすがたひとに見^みせまじ)

ふれまじといましめあれ(をみなへし

見るだ(ゆるせかざす色^{いろ}香^かを

小金ヶ原はむかし駒のすみしまき野なり

小金^{こがね}なるひ原^{はら}くり原木^{はらこ}がらしに

駒^{こま}ぞいなゝく冬^{ふゆ}のゆふぐれ

いにしへのまき野^のの原^{はら}をくりかへし

いまひらき見^みるあらすみの里^{さと}

ならしのゝ草^{くさ}のいほりに墨^{すみ}ぞめの

袖^{そで}ぞさびしき秋^{あき}の夕^{ゆふ}ぐれ

さびしくもならし野草のいほなれば

我すみぞめの衣ふりぬる

草も木もみなこがらしの野にしあれば

たゞ風のこゑならしの、原

秋の野に吹きくる風のはげしきに

草木の色もあはれ見へける

小夜ふけてわが手まぐらの夢さます

柴の戸たゞく松風の音

小松原芝かきわけて乙女らが

あらしひながらたけをかりける

なつの日はかぎりありしとしるものを

なにおどろかす秋の小夜風

心あらばしづかになけよ夜の蟲

人はかなしき秋にぞありける

二月のはじめ弘法のためと出で、今かへりしは八月なり

白雪をふみわけいでしならし野に

かへりていまは秋風ぞふく

焼ものを(ふ)きつけようが南無阿彌陀

在します胸の宮はやけじに

いかばかり人の命をやしなはん

木下(蔭)の夏の夕風

あかつきにあかねさすかたながめしに

ふきくる風かぜのすどしかりけり

朝あさみどり糸いとよりかけて白しろつゆを

玉たまにぞぬるゝ春はるの柳やなぎか

色いろみえてうつらふものは世よの中の

人ひとの心こころの花はなにぞありける

思おもひでゝ戀こひしき時ときは初はつかりの

鳴なきわたると人ひとへ

一

ふみてゆくこの道みち芝しばは我わがために

やしない草くさと云いふべかりなり

朝^{あさ}まだきくさの白露^{しろつゆ}とりあへず

まづしめしみん水^{みづ}莖^{くき}のあと

五香にて

春^{はる}たてばきゆる氷^{こほり}のこりなく

君^{きみ}がこゝろはわれにとけなん

(「古今集」恋一、より)

楓^{もみぢ}葉^はをかぜにまかせて見る^みよりも

はかなきものは命^{いのち}なりけり

あはれけふもまたゆふぐれになり^{なり}にけり

あすとはまたぬ命^{いのち}ながらに

いにしへのしづのおだまきいやしきも

世^よにはさかりのありにしものを

なげきつゝあだに月日を小金原

無佛のさとにすみぞめの袖

ふる里のおやにまされる君がなか

人目に知れずのちの世までも

ふりすてゝゆくはわかれのはしなれど

あとにこゝろののこりぬるかな

生み出され父母にまされる君が恩

ながくわすれじのちの世までも

たびかさねほかに語らんひともなし

あけくれたのむ君のめぐみを

色^{いろ}なしと人^{ひと}や見るらんむかしより

ふかきこゝろにそめてしものを

(「古今集」恋一、よみ人しらずより)

人^{ひと}しれぬおもひをつねにするがなる

富士^{ふじ}のやまこそわが身^みなりけり

(「古今集」恋一、よみ人しらずより)

浮^うき草^{くさ}の上^{うへ}葉^はしげれる淵^{ふち}なれや

ふかきこゝろを知るひとのなし

(「古今集」恋一、よみ人しらずより)

我^{われ}はこれ生^{しょう}死^じの海^{うみ}に沈^{しづ}む身^みぞ

なむあみだ佛^{ぶつ}たすけ給^{たま}へよ

ふるとおもふ月^{つき}日^ひはとほに有^{あり}ながら

心^{こころ}あ(へさ)る我^{わが}身^み老^{おい}けり

名にめでゝしばしの間にぞみつるかな

世に千代てふる白菊の花

墨ぞめのほかには染めぬ袖だにも

いざそへてみむ菊のにほひは

ちりに染むそしりをさへもめでつらむ

たゞ白菊のにほひばかりは

西天の聖蹟拜参發錫のとき

戀しけれ西にかたむく夕日かげ

さすがに御あとしたふ身なれば

印度聖迹に拜したる時

よろづ代はまだ遠ければ今更に

ふたゝび照せ佛陀伽耶の月

いにしへの鹿野の園生に訪ひ來れば

なく音もなくてあとぞかなしき

亡き母に手向く

しばしまたわかるゝものゝやがてゆく

西のみやこにあふ日をぞまつ

海原の水よりもなほ深かりし

母のめぐみをいかにむくいむ

法のため身は筑紫がた亡き母の

おくりにもれし罪をゆるせよ

亡母に手向まつらむ道のため

身をつくし路につくす業もて

補遺

年ごとに布きかゆる吾が草むしろ

廣きまろ屋のすみ／＼までも

水こしの目にもるほどの小蟲をも

三世の佛の數のほかかは

天に照り水にやどれる(月影の)

水ものぼらず月も下らず

かすもしれぬよろづの目には入りながら

常住に天の原に照ります

小蒸氣すゐじょうきの個々こごの微粒びりゅうに入りぬれど

みそらに照てらす一ひの日にして

大虚おほそらにかすなき分子ぶんし一々に

入いりても天そらに日は一ひにして

ぬば玉たまの闇やみの()さへ常つねに照てる

日ひのひかりそふれ秋あきの夜よの月つき

大ミオヤのおましにありて世よを見みれば(よ)

子こらをいか(に)見みゆるものかを

驚おどろの山高やまたかねの音おとは妙たへにして

摩訶まか()の何處どこにかひゝかさらめや

數かぎりなきまで（分れしも）

すべてそのまゝビルシヤナ佛

我觀念圓な鏡に溶けぬれば（九十三頁初行參照）

即ち大圓鏡智なりけり

大（に）自性の智慧は普く

十方三世に照り貫なり

かぎりなき佛のみむね知らせんと

十萬億ところ（
）

おごそかに照しましける太神の

みむねを仰ぎかゞみと（はせめ）

大ミオヤの其身に應ふ職をは(一七八頁最終参照)

己をつくして全きとしれ

人天の道に素養をうけぬれば

道德仁義も人道となる

人の世は何れより來て何こにか

ゆくべきかたも

何にかゆくべきみちも覺ほえじ

いで來しかたもしらぬ身なれば

あみりたは世にたぐひなき(一の

たまをやしなふかてにぞありける

天地にみち／＼にけるみめぐみを

くみてぞしるれ

—

大ミオヤのサハニヤのつくりものばかり

酔ふても／＼いよさめにけり

大ミオヤのサハニヤの酒に酔ふときは

酔かさめるか(さめ)ざるか酔か

法悦のこの味はひは—

よろづの味を和合しけるなり

むかし／＼すべての佛の味ひし

其かてばかり我は味ふ

清 淨 光

清^{きよ}らけき^なみ名^なに心^{こころ}のはれし夜^よは月^{つき}のひかりもいやまさりけり清^{きよ}らけき^{ひかり}光^{ひかり}のかげとみなすかなさやかにてらす秋^{あき}の夜^よのつき濁^{にご}りにもそまぬ蓮^{はちす}の花^{はな}のいろ清^{きよ}められにしこゝろともがな雲^{くも}はれてさやかに照^てらす月^{つき}かげを清^{きよ}き光^{ひかり}にたぐひてや見^みむ

歡 喜 光

よろこびの光^{ひかり}わたれるしるしにや春^{はる}の心^{こころ}はのどけかりけり

よろこびの光をよそにくらす身は

さぞうかりける世をや經ぬらん

憂しといふうき世のやみもはれぬべし

このみ光の照らすまへには

智慧光

静けくもすみたゝへたる水のおもに

月は夜なゝかよひくるなり

不斷光

たゆみなくすゝみくゝてまたもなき

聖きみくにゝやがてつかなん

内と外のさはなすものとなゝかはむ

聖き光をちからとはして

○

御名^{みな}をよぶ聲^{こゑ}にいつしかすむ水^{みづ}の

心^{こゝろ}にやどる月^{つき}のおもかげ

ゆく末^{すゑ}のめぐみとばかりおもひにき

もとより本^{もと}のミオヤなりしを

西東身^{にしひがしみ}はへだつれど心^{こゝろ}をば

おなじミオヤのふところのなか

(五番にて)

里人^{さとびと}のたのまぬ友^{とも}にならばやと

山家^{やまが}をこえて身^みをうつしけり

百の山いく重の雲はへだつれど

こゝろは同じみひかりのなか

(鹽原にて)

我がおもふかたをいかにとながむれば

しほやが原に秋風ぞふく

山水の音きゝつゝもおもひしる

ながれの末やいかゞならんと

大ミオヤの慈悲の衣におほはるゝ(三七頁参照)

身はとことはにあたゝかにこそ

あたゝかに慈悲のふすまをかさねきて(二〇七頁参照)

ほとけの中に寝ぬるたのしさ

の、しりの言ことの銃丸たまさへ通とほらぬは(二〇八頁参照)

忍辱しのぶの衣ころもきればなりけり

うけと云ふうけ多おほけれどみほとけの(二二三頁参照)

めぐみの味あじにしくものはなし

言ことの葉はにつきぬばかりにたへなるは(二二四頁参照)

念佛ねぶつさまやの味あじにぞありける

くみかはすミオヤの玉たまのさかづきは(二二五頁参照)

我わがみほとけのさけにぞありける

かすもなき三世さんよのほとけの味あじひし(二二七頁参照)

法喜ほふき禪悦ぜんねつを我わが糧かてとせむ

心だに無爲のみやこに住みぬれば（二五〇頁参照）

世のさま／＼も見ものなりけり

天地もみなみほとけの中なれば（二三四頁参照）

いづこかみだの外にやはある

あくがれて御名をよべども雲はれて（二三頁参照）

いつ見まつらむ月のみすがた

あくがれて西のみそらをあふぐなり

月のみすがた見まくほしさに

○

念佛者ねがひしやの心こころ本尊ほんぞんは六十萬まん

十萬億まんおくの奥行おくぎやうの堂だう

彌陀身心遍法界

衆生念佛佛還念

一心專念能所亡

果滿覺王獨了々

長石如德王臨家生福壽海無量長應慶種

佛也神也



省地身心通法身

時既在生心然中

省地身心通法身